

鬼と仏と

住友を破壊した男・伊庭貞剛

江上 剛

第三回

第三章 明治維新

1

一八六七年（慶応三年）十一月九日、第十五代將軍徳川慶喜は、よしのぶ天皇に政権の奉還を奏上し、二百六十年間にも及ぶ徳川幕府による支配が終わった。

しかし大政奉還をしたものの徳川慶喜は、「徳川家のあらん限り、天下の諸侯と共に朝廷をお助け奉たてまつる所存である」と重臣たちに言明したように、新たな政治体制を整えて、その中心になるつもりだった。

それに対して薩摩の西郷隆盛や大久保利通らは、武力をもってしても徹底して旧幕府勢力を倒し、新しい政治体制を作らねばならないと考えていた。

これは当然のことだろう。大政奉還したといえども徳川家は四百万石の領地を有し、諸藩にも大きな影響力を持ち続けている。

これでは名目だけの政権委譲であり、実質が伴っていない。このままの状態では尊王攘夷派の自分たちがやられてしまう。

西郷や大久保は、同じ倒幕の志を持つ藩や公家と協力し、軍事力を固め、同年十二月九日に天皇に王政復古の头号令を宣言させた。

クーデターである。

幕府、摂政、関白等を廃止し、総裁、議定、参与の三職を設置するなど新政府の樹立を宣言したのである。

この突然の王政復古に徳川慶喜と彼を支持する旧幕府側は激怒し、尊王攘夷派の薩摩藩らとの対立は決定的になった。

貞剛は、いつものように西川吉輔の幽閉先を訪問した。

すでに児島道場で前年の一八六六年（慶応二年）、二十歳の時に四天流の免許皆伝を許されていた。

今では、他の門人に対して指導する立場になっていた。

父の貞隆は、まだ泉州伯太藩に行っただけである。実質的に家長としての役割を果たしながら日々を過ごしていた。

自邸の前を通る中仙道は、ますます人の往来が激しくなっている気がする。それも武士が多い。世の中が不穏になっているのだ。

時折、吉輔に引き合わされた品川弥二郎のことを思いだす。

——品川殿は、今頃、国事に奔走ほんそうされているのだろうか。

そう思うと、なぜか胸の辺りが苦しくなる。

それは焦燥しやうそうというものかもしれない。同じような年齢の男が、自由に飛び回り、時代を動かそうとしている。それなのに自分は、いったい何をしているのだろうか。また何を為なすべきなのか。

吉輔の話を知りたい……。

座敷で待っていると、吉輔が急いだ様子でやってきた。

顔が火照ほてっているように見える。興奮を隠かくしきれないようだ。吉輔にしては珍しい。

「先生、いかがなされましたか」

貞剛は聞いた。

「ついに、ついに来たのだよ」

どっかりと座る。表情は緩んだままだ。心の底から喜びが湧わきだっている。喜びようが尋常じんじょうではない。いったい何事がおきたのか。

「京から迎えがきたのだ。王政復古の大号令が発せられたことは知っておるだろう」

吉輔が、にじり寄るように前かがみになって話す。あまりの嬉し

さに体までが反応しているようだ。

「はっ」

貞剛は、固い表情のまま答える。

「その直後に、私宛に中山前中将殿から、御所に召し抱えるので
すぐに上落せよとのご指示が参ったのだ」

中山前中将とは、前大納言中山忠能の嗣子である参与忠愛のこと
だ。忠能は、今回の王政復古を実行した首謀者の一人でもある。

貞剛にも一気に喜びが走った。

「それはおめでとうございます」

貞剛は、畳に頭を擦りつけんばかりに低頭した。

「ここに幽閉されて四年と六カ月。ようやく至誠が通じたという思
いである。今、新しい世となり、新政府は、全国から有為なる人材
を集めている。先ほどの大号令においても、見込みのあるものは貴
賤を問わず、忌憚なく申し出てこい、召し抱える用意があるとの仰
せだ。私のような商人風情にも国にご奉仕できる機会が与えられた
のだ。喜んでくれ」

吉輔が貞剛の両手を掴む。

「先生、私も同行させてください。私は児島道場の免許皆伝となり
ました。準備は十分でございます」

貞剛の口から熱い言葉がほとばしり出た。

「かたじけない。しかし、今、しばらく待つのだ。京の様子はまだ正直、十分に掌握しやうあくしてはおらん。まず私が行き、道を作る。その後で、必ず呼ぶ時が来る。時を待つのも修業だ。軽々しく動くでないぞ」

吉輔は、血気に逸はやる貞剛を優しくたしなめた。

「わかりました。先生のご指示を待っております。必ず、必ず、私も共に新しい世に貢献しようございます」

貞剛は、涙を溢れさせた。師である吉輔の出世を喜ぶと同時に、別れの寂しさが涙となったのである。

吉輔は、翌日、家紋をあしらった籠手こて、臍当すねあてなどの小具足こぐそくに陣笠じんがさ、袖長背割りの陣羽織じんばおりに黄金作りこがねの太刀という武士としてのいで立ちで、伴を従え、八幡はちまんから京へと向かった。

貞剛は、吉輔の姿が見えなくなるまで見送った。見送りには村の多くの人々が集まっていた。

貞剛は、ある種の興奮を覚えていた。

時代が変わるとはこういうことなのだ。吉輔は、罪人として幽閉され、いわれなき中傷の言葉を浴びせられたこともある。それが今では、英雄ではないか。多くの人が吉輔の背から放たれる輝きにまぶしさを覚えている。

貞剛は、吉輔を誇らしく思った。どのような境遇になろうと、吉

輔は己の道を貫いた。その結果、時代が自分の方を向いたのである。

その生き方は、私心なく、常に国の行く末を案じるものだった。

貞剛にとって吉輔は血の通った父ではないが、どう生きるかを導く人を父と言うなら、真の父であると言えるだろう。

吉輔の言葉によって国のことを憂うれい、男子の本懐は、国に尽くすことであると教えられた。

貞剛は、空を見上げた。冬の寒々しくどんよりした雲が厚く垂れこめている。その雲間から明るい光が差し込み、矢のように地を照らしている。貞剛は、その光に希望を見た気がした。

——自分も師の後に必ず続く。

貞剛は強く誓った。

吉輔は、翌年一月十六日に金穀出納御用係を命じられた。きんこくすいとうごようがかり

新政府の財務担当というべき役目である。

2

——一八六八年（慶応四年）一月三十日。

貞剛は、父貞隆の不在にあって家長の役割を果たし、新年の行事をつつがなくこなし終えた。

「先生は、どうされているだろうか」

朝日が昇ってくる。それに向かって手を合わせ、京に行った吉輔の無事を祈る。

貞剛にも世の中の情報が頻々ひんびんと入って来る。

自邸の前の中仙道は一層人通りが激しくなった。商人たちより、武器で身を固めた武士たちが多い。

大政奉還、王政復古の号令により、徳川幕府は消滅した。

薩摩藩の西郷や大久保はあくまで武力による倒幕を主張している。

薩摩藩は、徳川慶喜のお膝元である江戸で焼き討ちなどを行い、旧幕府を挑発した。噂では江戸城二の丸が焼失したのは、薩摩藩の放火によるものだという。

これに怒った徳川慶喜は、薩摩藩を討つことに決め、諸侯に命じ、大軍をもって京へ攻め入った。

貞剛は旧幕府側と新政府側との決定的な対立が近づいていると懸念していた。同時に吉輔の身を案じた。

吉輔は、新政府側である。徳川幕府は消滅したとは言え、未だに強大な影響力と軍を持っている。それに比べて薩摩藩や長州藩は見劣りがする。戦いの結果は、火を見るより明らかではないのか。

吉輔は、新しい時代を作るのだと勢い込んでいたが、それを見ずに果てるかもしれない。

そのようなことにならないように傍そばに仕えて、いかほどでも役に

立てないだろうかと焦りが募っていた。

懸念していた通り旧幕府軍と、薩摩藩・長州藩などで構成された新政府軍が鳥羽街道で衝突し、戦いが始まった。

貞剛が住む西宿でも、遂に戦争が始まったと大騒ぎになった。

母田鶴も不安気に「お父上は大丈夫であろうか」と貞剛に聞いてきた。

泉州伯太藩の飛び地を預かる代官である父貞隆も、いずれは旧幕府につくか新政府につくか、立場を決めなくてはならなくなるだろう。

「大丈夫だと思います」

貞剛は、これしか言いようがなかった。

しかし戦いはあっけなく思いがけない形で決着した。

薩長軍は、大砲など圧倒的な火器の力で旧幕府軍を打ち破ってしまっただのだ。

戦いは時の勢いがある方が勝つと言われるが、まさにそれを証明したのである。

吉輔が属する新政府軍が勝利したことに貞剛は安堵した。

「ん？ あれは」

街道をひた走ってくる男がいる。飛脚だ。うちに向かっている。

なにか急ぎなのだろうか。

「伊庭貞剛様でしょうか」

飛脚が貞剛の前で止まる。

「そうです」

貞剛が答えると、飛脚は「これをお預かりしております」と封書を差し出した。

貞剛は、手が震えるほど興奮した。吉輔からだった。

急いで封を解く。そこには懐かしき師の筆跡で「時機まさに到る。

君よ、起つて君国くんこくに尽くせよ」と貞剛の上洛じょうらく、京行きを促す言葉があった。

京への通行が容易になるように、吉輔が仕える公家白川殿の手形まで同封されていた。

勤王方である新政府が、貞剛の京への通行の安全を保証してくれるということだ。

「かたじけない」

思わず感謝の言葉が口をつく。その一方で吉輔が、貞剛の上洛を強く望んでいることも感じる。

貞剛は、吉輔の教えを守り、軽々けいけいに動くことなく耐え、指示を心待ちにしていた。

しかし我に返った時、迷いが生じるのはやむを得ない。

父貞隆は不在である。父からは家を守るように命じられている。

この家は、母田鶴、そして四人の弟妹がいる。自分がいなくなれば十四歳の新右衛門しんえもんに後事を託さねばならない。まだあどけなさが残る弟がその重責に耐えられるだろうか。

「すぐにも馳せ参じたいのだが……」

貞剛は封書を握りしめて庭に立ったまま、しばらく動くことができなかつた。

「起つて君国に尽くせよ……」

吉輔の言葉が、激しく貞剛の心を揺さぶる。

まだ戦闘は続くだろう。そこに参加すれば、死……。

死を覚悟しなければならぬ。その覚悟が定まっているだろうか
と自らに問いかけてみる。

吉輔の言葉が浮かぶ。「志士積年の素養は、唯ただ今日あるが為なり」と……。

何度も自分の心に問いかけてみる。命を捨てることは定まっているか。答えは、一つだけしか返ってこない。定まっていると。

貞剛は、いつもと変わらず稽古道具けいこを持つと、児島道場に出かけた。

多くの門弟たちと汗を流す。その間も貞剛は考え続けた。吉輔の上洛への呼びかけを心待ちにしていたにもかかわらず、このように迷いが生ずることを恥だと思った。

「士は己を知る者の為に死すと史記にありますが、それは真実でありましょうか？」

汗を拭いながら、貞剛は師範児島に聞く。

児島は、端然として「人はいつか死ぬものです。その死は、『泰山より重く、時に鴻毛より軽し』といます。その違いは死に方にあります。死すべき時に死ぬことが重要でありましょう。それが男子の本懐です」と、故事を借り、まるで貞剛の悩みを見抜いているかのように答えた。

「ありがとうございます」

貞剛は、平伏し、道場を後にした。

道場から帰宅後も、貞剛は自邸の庭で竹刀を振った。冬の冷たい琵琶湖の湖面を撫でて吹く風が体に当たると、一瞬、痛いという感覚になる。痺れ、凍り付くような寒さだ。しかし一心不乱に竹刀を振ると、額からは汗が噴き出す、なによりも忘我の境地に入ることができる。あらゆる迷いを竹刀の一振り、一振りで振り払う。

「精が出ますね」

母田鶴が貞剛の様子を見て、微笑を浮かべる。

貞剛は、それに答えず、ひたすら竹刀を振り続ける。

母の顔を見れば、せっかく振り払った迷いが、またぞろ顔を出してくるからだ。

夜になった。弟や妹たちは眠ってしまった。

貞剛は、座敷に田鶴を招き、上座に座らせた。そして平伏した。

「お話がございます」

貞剛は、顔を伏せたまま言う。

座敷には火鉢が一つあるだけだ。炭が赤く燃えている。しかし部屋全体を暖かくすることはできない。冷気が、畳から上り、体を冷やす。

「なんででしょうか。あらたまって」

田鶴は、よく燃えるように炭を火箸で動かしていたが、居住まいを正した。しかし緊張したところはなく、表情には柔らかい笑みが浮かんでいる。

貞剛は、その表情を見ると、思わず涙ぐみそうになった。

「申し訳ございません。私めに五十歳になるまでお暇を頂きたいのです。命さえ無事であれば、成功してもしなくてもその時は、必ずや帰宅してご孝行させていただきます」

「その時が参ったのですね」

静かに田鶴が言った。

貞剛は、驚き、顔を上げた。

「あなたが西川先生の教えを受けておられるのは存じ上げておりました。西川先生から呼び出しがあったわけでありませぬ。伊庭家は

宇多^{うだ}天皇を祖とする家柄であり、元々は朝廷をお守りする立場であります。そのことを思いますと、あなたが天皇をお守りしようとするのは、伊庭家の血でありましょう。あなたの考える道をお進みなさい。実は、私は今日あることは覚悟をしておりました」

田鶴は、取り乱すことなく話す。

貞剛は、田鶴の態度に有難いと思った。何を言われるか、どれほど取り乱されるかと懸念したのだが、これほど自分のことを信頼してくれていたのかと思うと、体が震えるほどの喜びだった。

「申し訳ございません」

貞剛は、田鶴ににじりより、その手を両手で包み、頭を下げた。

貞剛の手の甲に熱いものが落ちる。田鶴の涙だった。

「頼みます。命、命だけは無駄にしないでください」田鶴の目には涙が溢れていた。「お父上には、私から、よくよくお話ししておきます。この家のことは心配しないでよろしい。行きなさい」

「ありがとうございます」

貞剛は、田鶴の手を強く握りしめた。

「出立はいつでございませうか」

「明日の朝にも発^たとうと考えております」

「明日、明日ですか……」田鶴は絶句した。あまりにも早い。今から準備をしていると、寝る間もない。

「わかりました。決めた以上、ぐずぐずしていても仕方ありません。すぐに荷物を整えましょう」

田鶴は立ち上がり、座敷から出ていく。

貞剛は、その後ろ姿に低頭した。自分の我儘で、否、やむにやまれぬ情熱で、この家を出る。残されるのは母と、弟、妹たちだ。時代はどう変わるか全くわからない。その中で長男である貞剛という支えを失って、母はどうやって生きていくのだろうか、思いを馳せれば馳せるほど、辛さが身に沁みる。

旅支度を整えているうちに朝になった。

「粥ができました」

田鶴の声に座敷に行く。

貞剛は、湯殿で身を清め、袴を穿き、手甲、脚絆、籠手などの小具足をまとい陣羽織を着用した戦姿。腰には、伝来の刀を佩いている。

「お座りなさい」

田鶴は、凛々しく軍装を整えた貞剛に言う。

貞剛は、田鶴の前に座り、椀に入った温かい粥を受け取る。中には餅も入っている。

「振り分け荷物の中には中食や薬などもいれております。当座の資金も入っております。大事に使うように」

「わかりました」

温かい粥を啜りながら、母のありがたみを感じていた。

食べ終わり、椀を置くと、貞剛は深く低頭し、「では出立いたしま
す」と言った。

「武運長久をお祈りしております」

田鶴は立ち上がった。同時に襖の陰から、弟や妹が現れた。彼ら
の表情には不安な様子が浮かんでいた。

「後を頼んだぞ」

貞剛は、新右衛門の肩を叩く。

「はい」

新右衛門は唇を固く結び、微動だにせずに貞剛を見上げている。

「では行って参ります」

まだ陽は昇っていないが、東の空が白々とし始めている。

足元には霜柱。吐く息は白い。一步を踏み出すごとにザクツザク

ツと霜柱が踏みしめられる音が、静かな空気を破る。

氏神の若宮神社の祠の前で立ち止まり、拝礼をする。次に拝礼で
きるのはいつのことになるかわからない。手を合わせていると、霜
柱を踏みしめる音が聞こえた気がした。その音の方角に目を向ける。

「母上……」

田鶴が鳥居のそばで佇み、こちらを見つめている。

貞剛は、何もかもその場に打ち捨てて母の元に駆け寄りたい衝動にかられた。

しかし、奥歯を噛みしめ、唇を固く閉じた表情で、小さく低頭し、母に背を向けて歩き始めた。

3

貞剛は、京に到着すると、早速に吉輔のもとへ向かった。

駄屋町丸太町下ル東に屋敷はあった。天皇の居所である京都御

所の南側、広大な庭園が広がるその先の堺町御門^{さかいまち}辺りだ。東には鴨川が流れていた。

屋敷の門には、西川塾一新館の看板が掲げられていた。想像していた以上に広い。

中に入るとエイッ、メンツ、ドウツという鋭い声が聞こえている。

——剣術の訓練をしているのだ。

貞剛は逸る気持ちを抑えながら玄関に走る。

「伊庭貞剛、参上いたしました」

大きな声で玄関先から、屋敷の中に向かって叫ぶ。

「おお、伊庭君、来てくれたか」

吉輔が、廊下を急ぎ足で歩いてくる。表情にも喜びが溢れている。

「はい」

貞剛は、嬉しさにこぼれそうになる笑みを堪えて、答える。

「さあ、上がってください。疲れたであろう」

下男が、足を洗う湯と手拭いを運んでくる。

貞剛は、草鞋わらじを脱ぎ、足の汚れを落とす。

「さあ、君の仲間を紹介しよう。ちようど皆揃っているから」

吉輔が廊下を進み、座敷に入る。貞剛もその後続く。

中には、九人の若者がいた。皆、精悍せいかんな顔をしている。剣術けんじゆの稽古こを終えた直後なのか、まだ上気している。

吉輔の塾生たちだ。

「伊庭貞剛と申します。近江国蒲生郡西宿より参上いたしました。

よろしく願いたします」

貞剛は、丁寧ていねいに平伏した。

「伊庭君は、四天流の免許皆伝の腕前だ」

吉輔が紹介する。

「それは、それは」

塾生は、互いに顔を見合わせ、感嘆かんとんの声を上げる。

貞剛は、気恥きぢずかしくなった。剣術は習得したが、それが実戦で

役立つとは限らない。

鳥羽伏見の戦いは昨日のうちに新政府側の勝利で決着がついた。

しかしそれは兵数や剣術の力量の差ではなく、薩摩藩の大砲などの火器の力だと聞いている。

「伊庭君、鳥羽伏見の戦いは、とりあえず決着したが、まだ旧幕府側の力は侮れない。あなどまた新撰組などが洛中洛外で、我々の仲間を狙っている状況だ。君には、ぜひ市内警備隊に入ってもらって御所などの警護に当たってもらいたい」

吉輔が言った。

貞剛は、脇に置いた刀を握み、「お任せください」と言った。武者震いがする。

貞剛は、命じられた御所や市内警備に当たる以外に、吉輔の警護に注力しようと心にきめていた。

新政府の財政を担う金穀出納御用掛である吉輔に、どのような暴漢が襲ってくるかもしれない。

財政的に困窮こんきゆうしていた新政府は、大商人たちから強制的に金銭を徴収していた。それも吉輔の職務の一つだ。そのため多くの民衆の恨みを買っていたのだ。

貞剛が、吉輔の命によって京に来たのは、天皇を中心とした新しい国を造ることに加えて、自分に世界というものを教えてくれた吉輔を守るためだった。

父の不在中、貞剛にとって吉輔はまさに父同然だった。父を守る

ことは、孝の精神に富む貞剛にとって当然に選択する道であったのである。

貞剛は、京に着いたその日から塾生らと共に御所の警護に当たった。

御所の各門には篝火かがりびが煌々こころうと焚かれ、昼間のような明るさを呈していた。そこに貞剛は、家伝の刀を携え、夜を徹して警備に当たった。

貞剛は、命を捨てる決意で警備に当たっていたが、京は急速に平穩へいになっていった。

「徳川将軍が、大坂から逃げ出したそうだ」

他の警備兵たちが、篝火の火に手をあぶりながら話している。

徳川慶喜は旧幕府軍側の総大将であるにもかかわらず、鳥羽伏見の戦場にも出陣することはなく、大坂城内に立てこもっていたのだ。

——将軍が逃亡したのか……。

将軍が死を覚悟して前線に立ってこそ全軍が奮い立つ。総大将がこの体たらくでは、必ず新政府軍が勝つ。

吉輔が話していたが、その通りの展開になった。

——なんとも情けないことだ。三軍は帥すいを奪うべしか……。

論語の子罕しかん第九の二六「三軍も帥を奪うべきなり。匹夫ひつぷも志を奪うべからざるなり」を思い浮かべ、貞剛は徳川慶喜に怒りを覚えた。

三軍というのは三万から四万の大軍隊のことであり、そうした大軍隊であつてもまとまっていなければ、大将を奪うことができる。しかしたとえつまらない一人の人間であつても、心がしつかりしていれば、その志を奪うことはできないということだ。

貞剛は、徳川慶喜のことを言っているように思った。

新政府軍五千人に対して旧幕府軍は一万五千人という圧倒的多数の兵を集めて、戦いに臨んだ。しかしそれは烏合の衆だったのである。三軍の統帥は、おのずから統帥であるのではない。自分が先頭に立ち、犠牲になる覚悟で兵を鼓舞しなければ、三軍はまとまらない。

それは当然のことだと貞剛は思う。統帥は、兵の力を頼み、兵の力の上に立つものだからだ。

ところが徳川慶喜は、生まれたときから統帥として育てられ、兵のことなど意識したことがない。ましてや徳川二百六十年、一切の戦がない平和の中での統帥であつた。戦いへの心構えがあるはずがないだろう。

吉輔が言ったが、これからは西欧諸国と伍していかねばならない。正面からぶつかる気概を持たねば、植民地になってしまう。

徳川慶喜には統帥としての気概が全く欠けている。だから兵を置き去りにして自分だけ逃亡しても、恬として恥じないのだ。

こんな統帥では新しい時代を切り開き、人々を率いることはできない。

貞剛は、徳川慶喜の敗走を他山の石とすべきと肝に銘じた。

徳川慶喜という統帥が逃亡した結果、旧幕府軍や、多くの尊王攘夷派の志士たちを惨殺した新撰組なども皆、京から出て行き、急速に平穩になった。

警備に当たる他の兵の間には弛緩した空気が漂っている。

それでも貞剛は緊張して職務に当たっていた。しかしこんなはずではないという焦りにも似た気持ち日々、募ってくるのを止めることはできない。

死を覚悟して、西宿を出て、母田鶴に五十歳までの暇をもらったにもかかわらず、国に貢献できているとは思えない。

時代が大きく変わる時、若者はその変化の流れの中に身を投じる。新撰組を組織した近藤勇や土方歳三などは、農民でありながら国を憂いて幕府側についた。武士になれるという希望もあったから、旧幕府側の誘いに乗ったのだ。貞剛は、吉輔の誘いがあり新政府側についた。運命の分かれ目は、自分では測ることはできない。誰と出会うかだ。ほんの偶然に過ぎない。

しかし、自分のいるべき場所がここなのかは判然としない。もっと激しく自分を燃え上がらせるものがあるはずだと思っていた。

「伊庭殿、伊庭殿でござらぬか」

門の前で直立不動の姿勢で立っていたら、横から声をかけられた。
振り向くと吉輔のところへ出会った品川弥二郎ではないか。

「品川殿、どうしてここに」

貞剛は懐かしさに相好そうつらを崩した。弥二郎の陣羽織姿が凜々しい。

「西川先生にご挨拶あいさつに行く。ちょうど屋敷におられるようだ。伊庭殿も行きますか」

相変わらず明るく、弾むような陽気さに溢れている。

「一緒にさせていただきます」

貞剛は警備を別の兵に交代してもらい、弥二郎と並んで歩く。

「いかがですか？ 京は」

弥二郎が聞く。

「すっかり落ち着きました。各国公使の天皇への謁見えつけんが続いております。新政府が諸外国に承認されつつあります」

貞剛は歩きながら答える。

弥二郎は、新政府の中心である長州藩の藩士だ。ここでの出会いが貞剛を新たな世界へと連れて行ってくれるかもしれない。平和になつた京の治安維持など、もういい加減にしたい。

貞剛は血の騒ぎを覚えた。

「徳川慶喜殿も江戸城を出られ、新政府に恭順の意を示し、上野寛かん

永寺えいじに住まいを移されました」

弥二郎が言う。

「ではもう戦は終わりですね」

残念で仕方がない。せつかく習得した四天流免許皆伝の腕を見せる機会がない。

「いえ、そうでもありません。あくまで薩摩藩の西郷殿や大久保殿は武力で決着を望んでおります。旧幕府勢力の再起の芽を摘むためです。東征大総督府とうせいだいそうとくふから我々に江戸城総攻撃の命令が下っております」

東征大総督府は新政府の軍司令部である。有栖川宮熾仁親王ありすがわのみやたるひとしんのうが大総督だが、下参謀の西郷隆盛が実質的には全軍を動かしていた。

「江戸城を攻撃するのですか」

驚いて弥二郎を見つめた。まさに心臓部ではないか。

「まだまだ多くの諸侯が新政府に恭順の意を示さず、抵抗を続ける姿勢えじきでおります。早くこの混乱を收拾せねば、諸外国の餌食えじきになりますからね」

数々の修羅場を潜り抜けて来た弥二郎は気負うことなく話す。

羨ましい……。これが貞剛ていこうの偽いつはりらざる思いだった。

吉輔の屋敷に着いた。二人はすぐに座敷に上がり、吉輔と面会した。

変わらぬ温顔に接し、貞剛は嬉しくなった。新政府で重要な役割を果たしながら、尊大になることがない吉輔をあらためて尊敬した。

「おお、この国の未来を担う二人が揃ってお出ましとは」

吉輔が二人の前に座る。

「西川先生におかれましては、ご機嫌麗しいこととお喜び申し上げます」

弥二郎が恭しく平伏する。

貞剛もそれに倣う。

「いや、それほどご機嫌麗しくない」

吉輔が、温顔を曇らせた。

「いかがされましたか」

貞剛が聞く。

吉輔は新政府の財政担当として、張り切って仕事をしているものと思っていたのだが。

「弥二郎殿、新政府の財政難は深刻だ。そのため刀をちらつかせて庶民から金品を巻き上げておる。私もその役割を担っておるのだ。

確かに商人の出であるから、会計出納には他の人より詳しいかもしれない。しかし強請りたかりはしたことがないからのう」

吉輔は眉根を寄せる。

新政府は、朝廷の御賄料七万五千石が主な財源であり、国家財

政の多くはまだ旧幕府側が握っていた。

そのため吉輔たちは商人たちを呼び出し、「勤王の御為め」と称して金品を強引に調達していたのだ。金がないと嘆く者には、宥めすかし、最後は刀を見せて、脅かした。強請りばかりと自嘲するのにもむべなるかなという現状だったのである。

「申し訳ございません。ですが先生、今しばらくご辛抱をお願いします。新政府が江戸城を攻め、全てを幕府から取り上げました。暁には、そうした強引な調達は無用になります」

弥二郎はしっかりとした口調で言った。

「早くそうしないと民衆の心が新政府から離れることになる。それを憂慮します」

吉輔は厳しい表情となった。

「私は、今から錦の御旗を掲げ、江戸城攻撃に向かいます。もうお会いできるのが最後かと思ひ、挨拶に参りました」

弥二郎は笑みを浮かべた。

「いよいよ始まりますか……。早くこの戦争が終わればいいと願っております。錦の御旗を掲げられますか。弥二郎殿の発案ですか」

「孫子の兵法にも金鼓、旌旗を用いよとありますから」

弥二郎は陽気な笑顔を見せた。

孫子に「言えども相聞えず、故に金鼓を作る。示せども相見えず。

故に旌旗を作る」とある。

戦いの混乱の中で兵を統率し、同じ目的に向かわせるために孫子は陣鉦じんがねや陣太鼓を打ち鳴らし、旗を掲げよと言った。

「あなたらしい発想だ」

吉輔は言った。

弥二郎は、彼の師である吉田松陰しやういんが「事に臨みて驚かず、少年中、稀覯きこうの男子なり」と評した人物だ。

どのような危機に陥おちいろうとも、慌てず騒がず、どちらかというとその危機を楽しむようなところがある。

「錦の御旗は、新政府の幹部と協議し、私が長州で織らせました。他にも、金鼓を打ち鳴らすだけでは芸がありませんので、このような歌を作りました」

弥二郎は、正座した膝に手を置き、姿勢を正すと、少し上目遣いになった。

何が始めるのだろうか、貞剛は興味深く弥二郎の様子を見つめていた。

「宮さん宮さん、お馬の前にヒラヒラするのは何じゃいなトコトンヤレ、トンヤレナ あれは朝敵征伐あさていせいばつせよとの錦の御旗じゃ知らないかトコトンヤレ、トンヤレナ……」

朗々と良く響く声だ。

「ははは」

先ほどまで厳しい表情をしていた吉輔が笑い出す。貞剛も思わず笑みがこぼれる。

「トンヤレ節と名付けました。大村益次郎ますじろうが曲を作り、私が歌詞をつけました。江戸、そしてその後は奥州おとしゅうに行くことになるでしょうが、これを歌いながら進軍いたします」

「これはいい。道すがらの人々も新しい世になったと喜ぶことでしょう」

吉輔が言った。

歌は、辛い行軍を強しいられる兵士を慰なぐさめ、勇気づけるだけではなく、庶民の心をも鼓舞する働きがある。そうしたことを良く理解している弥二郎は、なかなかの戦略家だ。貞剛は、弥二郎との出会いが自分の運命を新たな世界に導いてくれる気がした。

「先生、品川殿、お願いがあります」

貞剛は、勢いよく平伏した。

「どうされましたか」

吉輔が聞いた。

「品川殿は、江戸、そして奥州へ進軍されると伺いました。私は、国に忠を尽くすべく、ここに参りました。しかしすでに京の治安は保たれております。このままでは役目を果たしているとは思えませ

ん。ぜひ、私を品川殿の軍に加えていただきたい。共に朝廷のために新しい国を造りたいのです」

貞剛は、一気に話した。

「伊庭殿、頭を上げてください」

弥二郎は言った。

貞剛は頭を上げ、弥二郎の顔を見た。にこやかで柔和な表情だ。

今から戦場に向かう顔ではない。

「私は長州人です。ここに至るまで多くの友人を亡くしました。私は彼らのためにも死地に赴かねばなりません。生死は時の運と申しますが、私の命は、亡くなった同志と共にあります。彼らが私を呼べば、私は死ぬだけです。その覚悟で国に忠を尽くし、新しい世を造るために戦います。あなたには違う役割があります。生きて、新しい国造りに尽くすのも忠であります。むしろの方が苦しいかも知れません。なにとぞここに残って新しい国を造ってください。もし私が生き残ることがありましたら、また見えまましょう」

弥二郎は、諭すように言った。

「品川殿の言う通りだ。国に尽くすにもいろいろな道がある。君は、ここに残って新しい国造りに努めなさい。いずれ新しい官制などが整備される。その時を待ちなさい」

吉輔も諭す。

貞剛は、再び平伏した。畳についた手に涙が落ちる。悔しいのではない。二人が、共に貞剛を氣遣つてくれる心根が嬉しいのだ。

「わかりました。私は、私の道で国に尽くしたいと思います」貞剛は言い、弥二郎に振り向く。「武運長久をお祈りしております」

「ありがとうございます」弥二郎は貞剛に頭を下げた。「あなたとは心の友、兄弟以上の交わりとなる気がします。二人で力を合わせて、新しい国造りに微力を尽くしましょう」

「承知いたしました」

貞剛は強く弥二郎を見つめた。

弥二郎は、微笑し、「ごめん」と言うと、素早く立ち上がった。「長の別れになるやもしれません。先生におかれましてはお体をご自愛くださいませ」

弥二郎は、それだけ言い残すと、吉輔の屋敷を後にした。

貞剛は、弥二郎を門まで見送り、弥二郎の姿が見えなくなるまで佇む。必ず弥二郎とは生涯の友となるだろう。そんな予感に心が満たされていた。

万の神々に誓約した。のちに言う五箇条のご誓文である。

貞剛は、警備担当として紫宸殿の周囲にいた。

ご誓文の内容は、徴士として紫宸殿に参内している吉輔から聞いている。

貞剛は、ご誓文の言葉の一語一語に熱くなった。これこそ新しい時代を切り開く言葉だ。これをこれからの生きる指針にしようと思意したのである。

「一、広く会議を興し、万機公論に決すべし。一、上下心を一にし、盛に経綸を行うべし。一、官武一途庶民に至るまで、各その志を遂げ、人心をして倦まざらしめんことを要す。一、旧来の陋習を破り、天地の公道に基づくべし。一、智識を世界に求め、大いに皇基を振起すべし……」

貞剛は声に出さずにご誓文を読み上げる。一つ一つが新しい世界を築かんとする信念に満ちている。

この日、もう一つ、良き情報が入った。

江戸城攻撃が回避されたというものだ。新政府の西郷隆盛と旧幕府の勝海舟との協議が妥結し、江戸城は新政府に明け渡され、徳川慶喜は江戸を去り、水戸に隠居することになった。

弥二郎のことを思った。無事できて欲しい。江戸の攻撃は回避されたが、弥二郎は奥州に進軍しているようだ。

「宮さん宮さん……」

貞剛はトシヤレ節を口ずさむ。弥二郎の陽気さを思うと心が和む。

*

吉輔に変化があった。

同年四月二十一日、吉輔は金穀出納御用掛の廃止に伴い、あつさりとその職を辞した。

もともと立身出世の慾のない人物である。周囲は引き留めたが、「天皇中心の国を造るといふ数十年来の念願が達せられた。これ以上何を望むことがあるうか」

吉輔は言った。

しかし貞剛にはわかっていた。庶民から強引に金品を徴収する新政府の姿勢に嫌気がさしたのだ。

吉輔の悩みがわかっていた貞剛は、引き留めはしなかった。そして貞剛もそう遠くない間に、この職を辞して故郷に帰る気持ちを固めていた。

吉輔を守るといふ役目がなくなった以上、ここにいつまでもいても仕方がない。

国に尽くしたいという思いは強くなる一方だが、吉輔が官を辞し

てしまえば、自分を官に取り立ててくれる人もいないのが実情だった。

ところが吉輔は国学に対する学識が評価され、皇学所に於いて天皇に古籍を講義する役目を命じられる。吉輔は、これこそ本来の役目と思い、それを承諾し、京に残る。

同年七月四日、上野に立てこもっていた旧幕府の彰義隊が撃退され、同年九月三日には江戸は東京と改められた。

まだ各地で旧幕府勢の抵抗は続いていたが、十月八日に会津藩が降伏し、ほぼ治まった。

後は榎本武揚や土方歳三らが立てこもる蝦夷地の箱館五稜郭がめだけだ。

同年十月二十三日に明治と改元された。これ以降、一世一元制が定められる。

貞剛は、吉輔の前に居住まいを正していた。

「京もすっかり落ち着きましたのでお暇を頂きたいと思います」

貞剛は低頭して言った。

「大変な時期に、私の頼みで上洛してもらい、感謝しています。必ず近いうちに然るべき立場で働いてもらうように手配します。その時が来るまで、自重して待っていて欲しい」

吉輔が真剣な表情で言った。

「いつでもお呼び出しをお待ちしております。次の機会は、四天流免許皆伝の腕を見せられる部署に願いたいものです」

貞剛は朗らかに言った。

「よくよく承知しました。しかし、もはやそうした剣術は不要な時代になるでしょう。次は法で治める時代になりますからね」

吉輔が穏やかに言った。

「そうありがたいものです。剣で決着をつけるのではなく、万機公論に決すべしです」

貞剛は答えた。

「お父上にもよろしくお伝えください」

「ありがとうございます。ところで品川殿は今頃、どうされているのでしょうか。ご無事でしょうか。私は、今回のお役目であの方に
お会いできたことが一番の収穫だと思っております」

貞剛の言葉に、吉輔は遠くを見るような目つきになった。

「あのお方のことだ。元気で活躍されていると思います。トコト
ンヤレ、トンヤレナですから」

「ははは、そうですね」

貞剛は声に出して笑った。

*

九カ月ぶりだ。貞剛は西宿の空気を胸いっぱい吸った。

「あっ」

貞剛は、門のところに父貞隆、母田鶴、そして弟や妹が立っているのを見つけ、小さく驚きの声を上げた。

走って駆け寄る。

貞隆の前に立つ。

「ただいま帰ってまいりました」

貞剛は、低頭する。

気恥ずかしい思いもある。五十歳まで暇が欲しいと言い、生きて帰ってくるなど全く考えていなかったからだ。

しかし、おめおめと生き恥を晒したわけではない。朝廷を、そして吉輔を全身全霊で警護したという自負はある。

「お勤めご苦労だった。よく帰ってきてくれた」

貞隆は笑みを浮かべた。

かなり老け込んだようだ。八年振りだ。貞隆が仕える泉州伯太藩の藩主渡辺章綱は鳥羽伏見の戦いの後、貞隆らの意見を容れて、

上洛し、新政府に恭順の意を示した。

「お父上こそ、ご苦労でございました」

貞剛は、貞隆をいたわった。

「いろいろ話もあるだろうが、まずは風呂に入れ。疲れを取ったらいい」

貞隆は、貞剛から家伝の刀などを預かった。

「珍しい人が来ていますよ」

田鶴たづが言う。

「珍しいと言いますと？」

「宰平さいへいですよ。あの人は、別子銅山の支配人になり、ご一新では苦労したのです」

「今日は、どうしてこちらに？」

「鉱山司付属試補とやらに任命され、お役目の途中で寄ったのです」

田鶴は、全身で弾けんばかりに喜びを発散するような笑顔だ。

長男である貞剛が、死を覚悟して京に行き、もはや亡きものと覚悟していたが思いの外、早く帰ってきてくれた。このことがまず嬉しい。

そしてもう一つ、弟宰平が出世して帰郷したことも嬉しくてたまらないのだ。

弟や妹たちが貞剛の周りではしゃぐ。次男の新右衛門だけは、貞剛が帰って来てくれたことを安堵しているようにも見える。

「新右衛門、心配をかけたな」

貞剛が声をかける。

「兄様、よくご無事で帰って来て下さいました」

新右衛門は、じつと堪えていたのか、両の目から大粒の涙をこぼし、慌てて着物の袂たもとで拭った。

貞剛も、思わずもらい泣きしそうになるのを我慢した。

風呂で体を洗い、たつぷりの湯に浸かり、目を閉じた。京での緊張した日々のが思い浮かぶ。多くの有為の士と交わりを持つことができたことが一番の収穫だった。それに目の前で時代が変わっていくのを見ることができたのは他では得難い経験だ。

しかし、心は完全に満たされていない。御所の警備という重要な役割であったが、命を懸けて国に尽くしたという実感は得られていない。

「くそっ」

貞剛は、湯の中に頭からすっぽりと浸かった。目を開ける。そこに弥二郎がいる。

——今頃、どうしているだろうか。奥州では会津が降伏したが、旧幕府軍の一部はまだ箱館で戦うと言っている。まさか箱館まで転戦していくのだろうか。

貞剛は、正直、弥二郎を羨ましいと思った。

命がぎりぎりまで追い詰められていくひりひりとした感覚。そんなものを味わいたい。新しい時代を作るといのは、そういう感覚を全身に感じることはないのか。剣で敵と戦い、仲間と激しい議論をし、共に新しい制度を作る……。

——ああ、天よ、熱く、燃えるような役目を我に与え賜え。私は準備をしております。

貞剛は息が切れるまで、湯に全身を浸けたままだった。

風呂から上がり、身支度を整えて客間に行く。

「貞剛、よく無事で帰ってきたな」

宰平が、貞隆とすでに酒を酌み交わしている。

顔が赤い。

「貞剛、お前もこちらへ来い。お前は酒を飲まないが、好物の鮎ふなずしがたつぷりあるぞ」

春に獲った鮎が、丁度食べごろの鮎ずしになっている。貞剛の好物だ。

「いただきます」

貞剛は、宰平の前に座った。

「立派になったな。京へ命を懸けて上ったのもよい経験になったよ
うだ。男ぶりが一段と上がった」

宰平は、貞剛を舐めるなようにじつくりと見つめ、酒を飲んだ。

「叔父さんこそ、別子銅山の支配人になられたとのこと。おめでとうございます」

貞剛は低頭して言った。

「ああ、ご一新は大変だった。またゆつくりと話したいが、幕府からお預かりしているお山なものだから、新政府は、それを取り上げると言い出してな。お山も、住友も、終わるところだったのだ」

幸平は、おおらかに笑う。並大抵でない危機を乗り越えた余裕なのだろう。「しかし、お山は住友が経営しろと新政府からもお墨付きをもらうことができた。まずは一安心だ」幸平は、ぐっと杯を干した。

「それはおめでとうございます」

貞剛は言った。

「ところで貞剛、お前もお役目が終わったのだ。お山に來ないか。

住友に來ないか。ぜひ来てもらいたい」

幸平は、深く頭を下げた。

「どうだ？ 貞剛。幸平殿が、こうおっしゃっている。考えてみないか。伊庭家、それに幸平殿の北脇家きたわきとも住友とは縁があるからのお」

貞隆も幸平に賛同する口ぶりだ。

「ぜひ、住友に来てくれ。新しい時代にふさわしい人材が必要なのだよ」

幸平は、再度、深く頭を下げた。

貞剛は、目を伏せ、口を固く閉じた。

この満たされぬ思いを住友で満たすことができるだろうか。

——あなたは違う役割があります。生きて、新しい国造りに尽くすのも忠であります。むしろその方が苦しいかもしれません。なにとどこに残って新しい国を造ってください。

弥二郎の言葉が蘇^{よみがえ}る。新しい国を造るのだ。この約束を果たさねばならない。

「申し訳ございません。私は、国に尽くす道に進みたいと思います」

貞剛はきっぱりと言った。

「住友に尽くすのも、国に尽くすことになるぞ。銅は、新政府でも絶対に必要なものだ」

幸平は、鋭い目つきになった。

「よく承知しております。それでも私は、官の道で、国に尽くしたいのです」

貞剛は、強い意志のある目で幸平を見つめた。それは新しい国造りに命を懸ける志士の目だった。

——トコトンヤレ、トンヤレナ

弥二郎が金鼓を打ち鳴らして奥州の街道を進む姿が見える。

自分の道をとことん進む。貞剛は固く誓った。

〈つづく〉